

萩生田内閣官房副長官 冒頭発言

「映画産業の海外展開に関する検討会議」を開催するに当たり、我が国の映画業界を代表する方々のご出席を賜っておりますことに感謝いたします。

本年、我が国の映画産業では、「シン・ゴジラ」や「君の名は。」等、大ヒット作品が続き、大いに盛り上がっております。「シン・ゴジラ」は、100以上の国・地域で配給が決定したほか、「君の名は。」は、異例の早さで12月に中国での公開予定と聞いており、日本映画が海外でも大きな関心を集めております。

しかし、市場規模で見ますと、北米と中国の市場は右肩上がりの成長を続けている一方で、我が国の映画市場は、近年、2千億円程度の横ばいで推移しているのが現状であります。

魅力に満ちた我が国の映画を広く、海外に展開していくことは、映画産業においてアベノミクスを実現していくことのみならず、国際文化交流に弾みをつけることにもつながります。

このような問題意識の下、我が国映画産業の成長戦略を描くことを視野に置きつつ、春先より、非公式に関係業界の方々との意見交換を重ねてまいりました。

その結果、本検討会議の流れも受けた形で、まず新たに知的財産戦略本部の下に、広く国内の映画振興策について検討するタスクフォースの設置が決定されたこと、また文化庁では、8月に日中韓文化大臣会合において映画交流の拡充に向けた対話を進めるとともに、29年度予算において大作の合作支援に対応できるよう「国際共同製作支援事業」の拡充及び「アジアにおける日本映画特集上映事業」の拡充を要求するなど、国内制度の強化についても取り組まれているほか、このたび、中国との間で映画共同製作協定の交渉を始める方向になったこと、以上を受け、本会議を公式に立ち上げる運びとなりました。皆様のこれまでのご協力に感謝を申し上げたいと思います。

世界を俯瞰すれば、ハリウッドを擁する北米市場のみならず、約13億人の巨大市場を抱える中国と手を携えていくことは、本検討会議の重要なテーマの一つといえます。

折しも、昨年、中国において、「Stand By Me ドラえもん」が興行収入100億円を超える大ヒットとなったほか、本年、中国で商業上映される日本映画は「君の名は。」を含め、11本に達する勢いであります。

翻って、本年の東京国際映画祭においては、7本もの中国映画が上映されました。それだけではなく、私自身も、角川による日中共同製作映画「空海」の記者会見に立ち会わせていただき、国際交流基金が招聘した映画関係者とも会

見ることができました。

そして、来年は、日中国交正常化45周年、また45周年に花を添える意味においても、映画祭交流、映画人材交流、映画共同製作協定の交渉をはじめとし、映画交流を拡大していくことは時宜を得たものであります。

私は皆様のご助力をいただき、中国との映画交流の拡大に取り組み、その成果を、安倍総理大臣にも報告し、タイミングをみて日中首脳会談の機会に触れていただきたいとも考えております。

もちろん、本検討会議のねらいは、中国のみにとどまらず、日本の映画を広く海外に展開していくことにあり、政府としても引き続きサポートしていきたいと思っております。

委員の皆様方には、それぞれのご経験、お立場から忌憚のない御意見を賜りたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

(了)